

として頴川君平雅範以下すべて十四人の名を記してある。引用中の點線は剝落によつて文字の不明なところであり、句讀は便宜余の施したものである。

此の凡例の轉載を以て、余は今はこの書の一應の解説に代へなければならぬ。尤もこれは第一冊に附けられた凡例に過ぎないが、これによつて漸く滿語研究事業に出發した唐通事達が、初めから清文鑑所收の滿語をすべて字頭順によつて、一氣に一篇の辭書に改編しようとする覺悟を有したのではなく、兎も角その第一輯に於て每字二三句或は五六句を摘録して四百二句を集めたに過ぎず、翌年上つた第二巻もまた同じ方針と組織で總計五百二十一句を集め、以下三・四・五と進んでそれぞれ六百一、四百三十二、五百九十九句を集めたに外ならぬことを知り得る。かくて通計二千五百五十五句を譯した安政二年に及びその中絶を見るに至つたのである。都合よく進めば後に之を集大成して一大辭書とする筈ではあつたに違いないが、編纂方針から考へると、何やらそこに充分の覺悟の缺如して居つたものゝあることを感得しない譯には行かない。それにしてもその譯語の上にも大なる苦心が拂はれて大概正鴻を得、其の假名の音寫の上にも細心の注意が拂はれて居ることは感嘆しなければならぬ。例へば挿入寫眞に就いて見れば分るやうに、B第一行 *erecun* を寫すに *エルツム* と書いてある。エレツムと寫しては原との綴音に用ゐられた文字を表はし得ないから *re* を寫すに *エル*、*cu* を寫すに *ウツ* を用ゐる、兩字の切音によつて原音を示したのである。語尾の *n* に對して *ム* を用ゐる、*ng* 音の *n* に對しては B 第三行に認めるやうに *ン* を用ゐてあるなども周到の用意である。但し *cu* を寫すにも *tu* を寫すと同様に *ウツ* を用ゐて居るのは、尙工夫の加へらるべき餘地があつたと思はれる。高橋の滿語輯韻には此の種發音を示す方法は用ゐられてゐない。